

[成果情報名] 水稻早生良食味品種「はえぬき」の奨励品種採用

[要約] 「はえぬき」は、「キヌヒカリ」と同等の収量性と食味を有し、穂発芽しにくく、平坦部や沿岸部で栽培しても心白、乳白粒等の発生が少なく整粒割合が高い。そこで、本県の6月中下旬移植栽培に適する早生品種として奨励品種に採用する。

[キーワード] イネ、奨励品種、はえぬき

[担当] 香川農試・作物担当

[連絡先] 電話 087-889-1121

[区分] 近畿中国四国農業・作物生産（夏作）

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

早生の奨励品種「キヌヒカリ」は、近年の温暖化の進行等に伴い心白粒、乳白粒等の白色未熟粒の発生が増加し1等米確保が困難な状況が続いている。さらに、耐穂発芽性が不十分なことから、収穫期に降雨が続く年は穂発芽による品質低下を招いたり、種子確保にも支障をきたす場合がある。このため、外観品質と耐穂発芽性に優れた早生の良食味品種の早期導入が求められている。

[成果の内容・特徴]

「はえぬき」の品種特性は、「キヌヒカリ」に比べて、次のとおりである。

1. 出穂期、成熟期は同等の早生に属する。
2. 稈長は5cm程度短く、穂長は1~2cm長い。穂数はやや多く、草型は“偏穂数型”である。耐倒伏性は同等の“強”である(表1)。
3. 穂発芽性は“中”で、「キヌヒカリ」より穂発芽しにくい、「コシヒカリ」よりしやすい(表2)。
4. 紋枯病の発生程度はやや多く、いもち病の発生については同程度である(表1)。
5. 収量性は同程度(表1)、食味は同等の極良食味である(表3)。
6. 登熟期が高温で経過しても心白、乳白粒等の発生が少なく、整粒割合も高い(表1、図1)が、平坦部や沿岸部で早期栽培すると整粒率70%の確保はできなくなる(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 普及対象地域は県内全域とするが、平坦部及び沿岸部では品質を確保するために移植期は6月中下旬とする。当面は「キヌヒカリ」に替えて普及を図り、栽培面積は市場評価に応じて拡大する。
2. 耐倒伏性に優れ、増肥により増収するが、良食味を確保するために施肥水準は「コシヒカリ」並みとする。
3. いもち病と紋枯病の防除を適切に行う。
4. 「キヌヒカリ」より穂発芽しにくい、良質米生産のため適期刈取りを励行する。

[具体的データ]

表1 奨励品種決定調査成績

試験年次	品種	出穂期 (月,日)	成熟期 (月,日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	収量 (kg/a)	千粒重 (g)	外観品質 (1~9)	整粒率 (%)	倒伏 (0~5)	葉いもち (0~5)	穂いもち (0~5)	紋枯病 (0~5)
生産力検定 1997~'02	はえぬき	8.14	9.21	72.9	19.5	406	52.2	22.2	3.6	85.9	0.0	0.6	1.0	2.2*
	キヌヒカリ	8.14	9.20	78.3	17.8	370	53.6	22.5	4.6	76.0	0.4	0.9	0.8	1.6*
現地試験 1998~'02	はえぬき	8.13	9.17	75.9	18.6	390	57.1	22.1	4.0	-	0.2	0.6	0.2	1.7
	キヌヒカリ	8.12	9.15	79.2	17.0	364	56.3	22.4	4.5	-	0.1	0.6	0.2	1.3

注) 生産力検定試験:香川農試本場(高松市仏生山町)における標肥区の平均値、*:2002~2003年の平均値
 移植期:6月18~19日、育苗手帳(1株4本)、条間30cm、株間18cm
 施肥要素量(g/m²):1997~'00:基肥5-穂肥I(-18日)3-穂肥II(-10日)2、2000~'02:基肥4-穂肥I(-18日)2.5-穂肥II(-10日)1.5
 現地試験:県内8ヶ所の平均値、移植期:6月中旬、その値は委託農家の慣行による。
 外観品質は高松食糧事務所に判定を依頼(1~3:1等、4~6:2等)、主たる落穂理由は、「はえぬき」は充実不足、「キヌヒカリ」は心白・乳白粒であった。
 整粒率:K社製米粒判別機(RN-500)による測定、倒伏及び病害程度は、0:無、1:微、2:少、3:中、4:多、5:甚

表2 穂発芽性に関する結果

試験年次	採穂時期	品種	置床後果穂発芽率(%)			
			3日	7日	10日	14日
1999	成熟期	はえめき	8.0	26.0	-	-
		キヌヒカリ	26.0	49.0	-	-
		コシヒカリ	0.0	14.0	-	-
2002	成熟期 2日前	はえめき	0.8	16.3	18.0	18.3
		キヌヒカリ	1.0	26.3	37.5	47.0
		コシヒカリ	0.3	5.5	8.0	11.3

注) 生産力検定試験ほほより採穂し、脱粒して生育の中層な節を低減した。水を含ませたる紙を敷いたシャーレ内に置床し、20℃全暗条件下で保持。

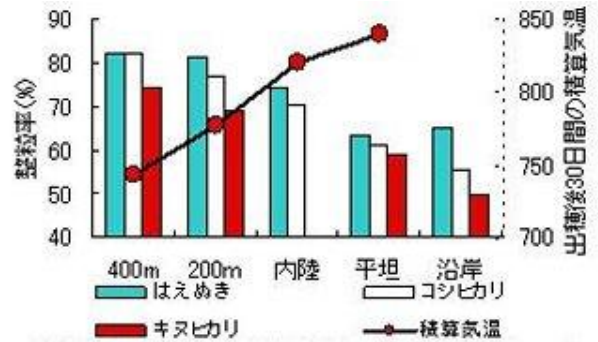


図1 登熟期間中の積算気温が整粒率に及ぼす影響(1999)

注) ポット栽培した稲を出穂期に標高の異なる地点へ移動させた。整粒率は米粒判別機(RN-500)で測定。登熟期に高温に遭遇させるため、本試験は早期栽培(5月11日移植)で実施した。

表3 食味官能試験結果(基準品種:キヌヒカリ)

品種名	食味官能評価					
	外観	香り	味	粘り	硬さ	総合
はえめき	-0.12	-0.02	0.19	-0.05	0.00	-0.04

注) 生産力検定試験(1998, 99, 01, 02年)サンプルの平均値
 パネラー: 香川県農協職員(各試験10~20名程度)
 評価: 各項目とも基準品種を0とし、-3~+3の範囲で評価した。

[その他]

研究課題名 : 奨励品種決定調査

予算区分 : 県単

研究期間 : 1997~2002 年度

研究担当者 : 大山興央、大川俊彦、宮下武則、森 芳史、山田千津子、福島 淳、西村 恵

発表論文等 : 大山興央 (2003) 豊穰 41:4-5.